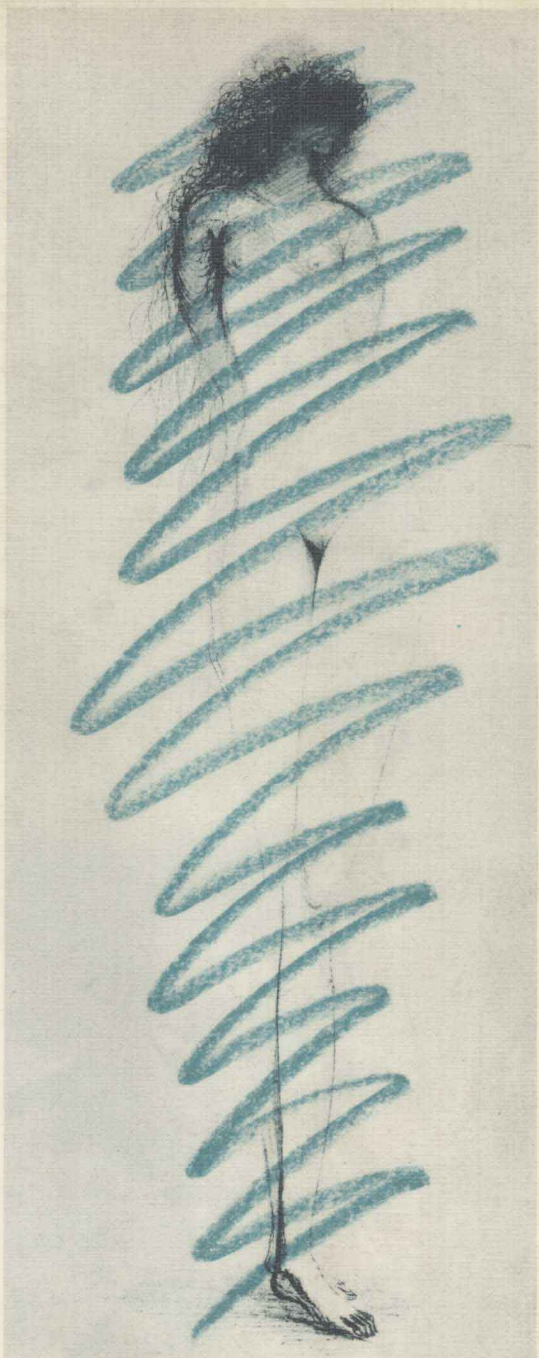


塔の子 尾高修也



塔の子

尾高修也

塔の子

©1979

昭和五十四年七月十日 初版印刷
昭和五十四年七月二十日 初版発行

著 者 尾高修也

装幀者 司 修

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五

電話 東京―三五五―五三二一（営業）

三五五―五三二一（編集）

振替口座（東京）〇一〇八〇二

印刷 暁印刷

製本 小高製本

定価はカバー・帯に表示しております。

塔屋暮らし
塔の夜景
塔の子

135 49 5

塔
の
子

塔屋暮らし

1

里子のアパートへ行くのに、東武電車の梅島で降りるたびに、何と空気の悪いところだろうと思う。梅雨に入ってからには特にひどい。スモッグなのか、場末の街が濛々とかすんでいる。トラックがやたらに通る。排気ガスが鼻先に吐き出されると、瞬間あたりが暗くなる。落ちていく太陽が光を失くして、もやもやと茶色い。薄汚ない毛糸の球みたいに小さい。

里子は出不精で、晩飯など店屋物をとりたがる。特に抱きあったあとなんかは動きたがらない。私はなるべく外へ連れ出すようにする。今日も里子のアパートで三時間まごころしてから、七時半になったのに驚いて一緒に出た。来たときより車は減っているが、空気が汚ないのは夜も同じだ。腹がへったのに気づいてそういう空気に触れると、気晴らしらしい気分が起る。せいぜい駅まで歩くだけだが、そんな気晴らしにも馴れたものだと思う。工場や工員住宅のあいだ

の道を折れ曲って五、六分歩く。駅前の大きい蕎麦屋へ入る。客は少なくなっている。

天井に近い所のテレビから、閑散とした空気に音が流れっぱなしだ。畳の席で足を伸ばして、しばらくテレビを見あげていた。私はもう正業についていないから、テレビでやっていることからも正業の固さのようなものを感じとる。画面で何をやっているかは頭に入りにくい。ただ固さがちらちらするのを追って見あげている。

ビールが来たので差し向いで飲んだ。里子は長い髪をいい加減に梳いただけで出て、顔色がくすんでいる。さっきまで汗をかいて生気も浮んでいたのに、また血の色が消えてしまった。ここ二ヶ月ほどもつきよ塾居をつづけて不健康だからだ。白い細面はそおもてに、塾居の淀みが灰色の膜のように出ている。広い場所の光で見ると、やせた頬のはしほしが尖っている。顔の輪郭に張りが無い。二十九の女が不健康ならこうだ、と思える。

「僕が少しずつ運動させようか。仕事が始まったら参るぜ」

「平気よ。あたしはほんとうの夏になれば強い。興奮するとシャンとしちゃう。いつもそうだわ」

「泳いだりするといいいんだがな。そろそろ気をつけろよ。これまでみたいにはいかないかもしれない」

「日本にいる時とは全然違っちゃうんだってば。大丈夫、大丈夫。あなたが見たらびっくりするくらい強くなる」

里子をはじめて、細い目に光を滑らせるようにした。瞳の黒さが勝手にちらちら揺れた。里子

の勝気さは、昔の女のように細く切れた目に光が動くとき一番はつきりした。目尻のほうへ光を動かして笑ってみせるようなところがあった。

ふだん、体もしぐさもなよなよしている。倦怠の軛くびきに馴れ合ってぐにやりとするのが得意だ。不健康が頼りないやわらかさになって、なよなよ動く曲線を作るといふようだ。その動きがからまってくる時、しつこさが不思議にひっそりしている。私は何だか時代離れのした空気に沈んでいく心地がする。

最初、そんな里子が別人のように活動的になる時のことなど、なかなか信じられなかった。里子の仕事は、もうじきかき入れどきが来る。海外旅行の団体の添乗員で二ヶ月は飛びまわる。仕事は、世間の春休み、夏休み、正月休みの時期にまとまって入る。すると、里子の生活は切り替ってしまう。二、三ヶ月蟄居したあと、生気が沈みこんでしまったあと、一気にそんな活動が来るのだ。活動は主に日本を離れてからのことだから私にはわからない。

「ねえ、これからちょっとお湯へ行っていい？　しまった、用意して来るんだった」
「行っておいでよ。僕は今日はめんどうだ。一人で待ってるよ」

「蒸し蒸しするのだけはいやだわ。日本だなあって思うわ」

天どんを食べた。ビールの酔いがいい加減まわってぐったりすると、人より暇のある暮らしに根がおりにいく気分が見えるようだった。一人きりの、どことなく貧乏くさくて頑固な酔いというものも見えた。会社勤めの疲れが三ヶ月前に片づいてからも太り出すでもない体が、赤らんだままぎゅっと固くなっているように感じた。全体が小さくて変に骨っぽい気がした。

里子のアパートは、石屋のわきの狭い道を入ったところにある。昔の田舎道らしいねうねした道で、枝道もいくつあつて、それが斜めについてすぐ先でまた分れたりしているので、建てこんだ二階家が道なりにあつちを向いたりこつちを向いたりしている。そういう一帯に、銭湯の隣りがぽっかり空いている。児童公園になっている。その埃っぽい小公園のむこうを限って、里子のアパートが細長く見える。ポロポロの板壁が、濃い緑色に塗ってごまかしてある。ペンキ塗りの原色のアパートなど珍しいと思つてちよつと眺める氣になる。

児童公園の夕方というのは何とも騒がしい。子供たちはもちろんだが、子供についている若い母親ものべつけたたましい声を出す。しつこいのはむしろ女親の声のほうである。夕方は工場の騒音も絶えてわりに静かになるところへ、ごみごみした一帯の唯一の空地に、騒音がはち切れそうになる。

さつき里子と戯れていたあいだがそうだった。裏側の台所の窓から、公園の金切声がすべて飛びこんできた。表と裏を開けておくと風がよく通るのだが、馴れないうちは人声がかなわなかった。里子も、外国から戻った当座は窓を閉めたりするが、やがて馴れてしまうので、今日も開けっぱなしだった。起きあがつて台所横の便所へ行くとき、目の先に児童公園の地面が見えた。砂場の砂がそこらじゅう撒き散らされていた。シーソーに乗ってギーギーやっている女の子の片方が、窓のところまで持ちあがつてきた。

蕎麦屋で天どんを詰めこんでしまうと満足した。満腹というのではない。むしろ、もう少し食えると感ずるところから、今の自分らしい落着きが来る。無駄な金はそうそう使えないという食

い方から、つまり腹八分の感じからかえって落着きが来て、満足もそこに引っかかっている。自分の現在が一番ピンと来るのはそういう瞬間かもしれない。

骨っぽい満足だ、と何だか老けた気分になって煙草をふかしていた。会社を辞めたことも、今無為らしくしていることも、すべて領^{うなず}いてしまえそうだ。そんなやり方の三十二の男というまでだ。里子と気晴らしに出て食べるとき、そのことがよくわかる。わかったままじっとしていられる。その点、里子は相手としてありがたい女だと思える。

「まだ夜中に目が覚めるかい？ 例のホステスは近頃どうしてる？」

頭はぼんやりしていて、口だけ勝手に動いた。里子はテーブルには、すによりかかっていたが、切れた目尻のほうから瞳を覗かせるようにゆっくり見あげた。

「フフ、あれから階段は落ちないわ。でも、やっぱりガタンガタンと派手にあがるわね。だって、このごろは馬の蹄みたいな靴なんですもの。酔ってるだけじゃなくて、運動神経もないらしいわ」

「やせてるけど、不器用そうな女だな。夜中に帰ってくると安心するんだらう。あれはずいぶん歳^{とし}だ」

アパートの一階の戸口は、^{ひあわ}廂間の薄暗いところに並んでいる。里子の戸口のすぐ前に、鉄の外階段が二階へかかっている。建物から少し離れていて廂間をふさぐ恰好だが、上で折れて二階の通路へつながっている。階段の足音が高いと、上へ行ってから、里子の部屋の真上あたりでカン響く。

「でも、うちのアパートの人はおとなしいほうね。特に男はおとなしいの。ほとんど勤め人らしいわ。あたしが起きる頃はもういないし、夜はいつ帰ったのかわからないくらい」

「うん。いつ行ってもおかみさんばかりだな。それに、モグラみたいに籠りっきりの、おかみさんじゃないのが一人だ」

「バカ。あたしは好きなのよ。こんなところで暮らすのは性に合ってるみたい。夕方なんかおかみさんがぞろぞろ歩いているところへ出ていくと、案外いい気分よ。うれしくなるの」

「住んでいても、君は旅行をしているようなものなんだな。だからおもしろがるんだ。買物に歩きたがら一人笑いしてるんじゃないのか。大体わかる」

「ここの暮らしに戻ると、お便所の臭いが気になるわ。しばらくはそれがいやだわ。でも、外国も場末は似たようなものよ」

車がめっきり少なくなっている夜道をアパートへ戻った。溝にはかなりの水が流れていた。最初にここへ来たとき、道端にまだ溝があるのを珍しいと思ったものだ。工場が流すのか、汚水が着実に流れているのに目が惹かれたものだ。歩きながら、私は今夜も時どき足もとの水を見ていた。青白い膿みたいな色だった。角の石屋まで暗くて、それから明るくなった。魚屋、肉屋、八百屋、酒屋、銭湯が、ひととおり揃ってちまちまと並んでいるからだ。児童公園に向いあった側には、「もつやき」の暖簾のさがった店や朝鮮料理店などくっつき合っている。小屋みたいなもつやき屋は戸が開けてあるので、暖簾の下からここの工場の男たちの足がたくさん覗いている。

兒童公園はひっそりしている。そちらへ入っていく。里子のアパートが昔の兵舎みたいに伸びている。ペンキの緑が暗い。銭湯の裏側、焚き口や煙突のあるところと小路一つへだてて隣りあっている。公園を横切り、銭湯の裏手をすり抜けるようにアパートの表へまわる。

里子が浴衣に着かえて湯に行ったあと、私は一人でぼつねんとしていた。大そうなボロ家だが、間取りにはアソビもあってかなり広い。八畳と六畳が並び、奥に六畳分くらいの台所がある。六畳間は一間幅で、八畳間より一段高くなっている。さっきの寢床が敷きっぱなしだ。銭湯側の隣りだけ内階段があるので、六畳間の奥のほうは隣りの階段下というわけで、天井が斜めになっている。

その六畳間で最初に親しみあった晩、里子の上になっているあいだ中、私は仏壇のことを気にかけていた。頭のすぐ上、斜めになった天井の下に、里子の両親の位牌をおさめた仏壇があった。それは小さい衣裳簞笥の上にのせられて、扉が閉めてあった。両親をこっそり閉じこめてしまったな、と私は時どき思っていた。扉は小ざれいにつるんとしていた。女の手でいかにもそっと閉めてきれいにしていた。

ここへ来てまだ長くないと里子は言っていた。両親の位牌を運んでアパートを移り歩いている女というのが、私がここでまず知ったことだった。里子は女きょうだい二人の長女で、妹はとくに片づいていた。里子は落着かぬ身ながら、たぶん位牌は自分で持ち歩くと言っているが、妹はとっくのころ。妹との間はぎくしゃくしていて、むこうが訪ねてくることもないようだった。

仏壇は情事のたびにちらちら目に入った。蒲団がこちら向きだからまずいんだ、とその都度思

った。里子があえいでいる最中など、私はつるんとした扉を見ていたりした。一間幅の六畳間は寢床を敷くと狭苦しく、いろいろ積みあげてあるものなどがそびえ立ち、仏壇は上に抜きん出ている、私たちは底の底でうごめいている気分だった。

ひとりで里子を待っているあいだ、私は寝そべったりできない。八畳間のまん中に膝をかかえて、がらんとした台所をただ見ている。女の住まいにしては飾りけのなさすぎる、ボロむき出しという室内を見まわしている。どちらの隣りからか、テレビの音が細ぼそと聞えている。里子は人づきあいの考えがいい加減で、自分流儀がなかなかしぶとくて、けなげに見えることなどない。だが、今日の前にいないとやはりどこか哀れに思えてくる。

台所の窓のカーテンが開けてある。児童公園の闇が、梅雨どきの湿気に青っぽく煙っている。黄色い畳の上にじっと浮んでいる私自身がほとんど見える。いつまでも同じ恰好で女の部屋を見ていそうな自分がわかる。会社を辞めて、これが望みどおりなのかもしれない。

今夜は雨になるのか、と思って背後の窓を振りかえってみた。廂間の闇をしばらく見ていた。雨の気配がほんとうのように思えた。立って覗くと、四角いコンクリートの飛び石がポツポツ濡れかけていた。

雨がはっきりして、廂に当る音がわかるようになってすぐ、里子が帰ってきた。

「ヒャー、いい気持。少し濡れるとちょうどいいわ。わざと走らなかった」

と言って、里子は長い洗い髪を揺すった。いい血色になっていた。

「今傘を持って迎えに行くところだった」